人と自然と文化にやさしい地域づくり

山口県教育

Education of the Yamaguchi prefecture

人間性豊かに生きる ―「人間性」を求める―

1

令和5年　No.1331

令和3年度　第74回山口県学校美術展　推奨作品
「江戸時代から続く歴史・萩・明倫学舎」
萩市立明木小学校5年（受賞時）　西村（にしむら）　友歌（ゆか）

◎第21回やまぐち教育の日 第49回教育県民大会 岩国大会

■岩国大会に参加して
上関町立上関中学校　校長　吉中　孝志
山口県教育会山口支部　事務局長　吉冨　肇

■第34回「金子みすゞ賞」童謡詩入賞作品
山口市立大殿中学校　3年　堀　涼羽
周南市立須々万中学校　校長　河辺　哲也

■第13回「わたしの志」作文入賞作品
山陽小野田市立高千帆中学校　2年　畑　佳奈美
公益財団法人松風会　事務局長　川上　修一

■地域活性化活動助成事業
岩国市立柱野小学校　校長　藤村　純子
下関市立東部中学校　校長　小戸　毅

■SDGsの取組
防府市教育委員会教育部学校教育課
指導主事　吉村　友恵

あなたのアクションは…

山口県教育会がすすめる
「元気やまぐち」三つのアクション

◎あいさつ 返事で 明るいやまぐち
◎笑顔でつなぐ 安心やまぐち
◎ゴミ 落書きのない
美しいやまぐち

一般財団法人　山口県教育会

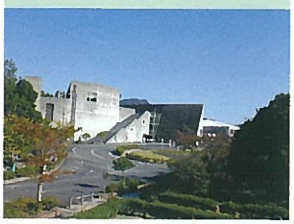
〒753-0072　山口市大手町２－18　TEL 083-922-0383　FAX 083-922-5768
URL http://www.ykyoikuk.or.jp　E-mail ykyoikuk@ruby.ocn.ne.jp
明治36年4月第１号　毎月１日発行　発行人　会長：倉増誠彦／編集長：西岡　尚

第21回やまぐち教育の日・第49回教育県民大会　岩国大会

大会主題

「人間性豊かに生きる」
～繋がりを広げ、深める～

期　日　10月29日（土）
会　場　岩国市周東文化会館



開会行事　12：50～13：30

大会会長挨拶
倉増　誠彦

来賓祝辞
山口県議会議長代理
山口県議会議員
槙本　利光 様

アトラクション　12：20～12：45

合唱：生涯学習団体　童謡を歌う会「赤とんぼ」

入賞者表彰及び朗読　13：30～14：00

「金子みすゞ賞」童謡詩

「わたしの志」作文

※入賞者氏名を4～6ページに掲載

来賓祝辞
和木町長
米本　正明 様

来賓祝辞
山口県教育委員会教育長
繁吉　健志 様

右　総合司会　河林由貴子
左　手話通訳

来賓祝辞
岩国市長
福田　良彦 様

実践発表　14：15～15：00

テーマ：地域教育ネットと私たちの学校・園づくり

子どもの育ちと学びをつなぐ　円滑な接続の具現化
和木町立和木こども園　映像発表
副園長　岸本　京子・松井　千登世

「ふるさと周東」を誇れる町にするために
岩国市立周東中学校　生徒会
会長　安堂　紀美子
副会長　小林　千草・髙橋　颯太

ふるさとに誇りをもち、自分の夢や目標の実現に向かって努力する子ども
岩国市立玖珂中学校　生徒会
役員　三坂　圭叶・藤重　現大

記念講演　15：05～15：55

演題：岩国市の教育

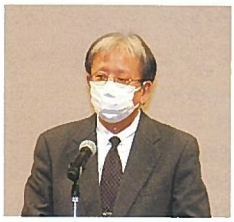
岩国市教育委員会
教育長　守山　敏晴 様

講演内容

1　小中一貫教育
2　英語教育
3　いじめ等　教育支援
4　家庭教育支援
5　GIGAスクール構想

閉会行事　15：55～16：05

大会実行委員長挨拶
藤井　保夫



次回開催地挨拶
山口支部長
大野　和規

岩国大会に参加して

様々なつながりを実感する

上関町立上関中学校
校長　吉中　孝志

第21回やまぐち教育の日・第49回教育県民大会が生涯学習の根付く岩国（玖西）地区において開催されました。

アトラクションでは、生涯学習団体童謡を歌う会「赤とんぼ」の皆さんの素敵な歌声や溌剌とした表情から、生涯にわたって学ぶことの素晴らしさを伝えていただきました。

開会行事で披露された「金子みすゞ賞」童謡詩と「わたしの志」作文の講評ついては、本稿に掲載されるとのこと。私の講評は無用でしょうが、どちらも表現豊かで、心を揺り動かされた発表であったことを皆さんにお伝えします。

続いて行われた三つの実践発表では、「『和木学園』を基盤とした町ぐるみでの教育が進められていること」「『ふるさと周東』を誇れる町にするために熟議を通して語り合い具現化するための取組が図られていること」「『学校・地域連携カリキュラム』に基づいた玖珂小・中の9年間の学びと育ちを地域と協働してつくり上げていること」などが紹介されました。元気な挨拶を行い、大勢の前でふるさとの良さについて熱く語る生徒たちが、これら実践の成果を裏付ける説得力のある姿として印象的でした。

記念講演「岩国市の教育」については、岩国市教育委員会教育長の守山敏晴様より「小中一貫教育」を中心に「英語教育」や「家庭教育支援」「GIGAスクール構想」など、岩国市が一体となって推進している様々な取組についてご紹介いただきました。

直面する学校課題に目が行きがちな日常から少し離れ、教育の原点に立ち返って学ぶことの良さや学びのつながり（連続性）の大切さを素直に実感できた午後のひとときでした。

実りの秋を実感する素敵な大会を企画・運営していただいた岩国地区の皆様をはじめ関係各位に心から感謝申し上げます。

3年ぶりの対面開催

（一財）山口県教育会山口支部
事務局長　吉富　肇

退職して5年、久しぶりに参加した県大会は心温まる生演奏に包まれてスタートしました。生涯学習団体童謡を歌う会「赤とんぼ」の歌声です。

続く開会行事では、「金子みすゞ賞」童謡詩と「わたしの志」作文の表彰と朗読が行われました。童謡詩「あくび」では、あくびを〝神様がまく種〟と捉え、〝愛らしさを咲かせる〟ためのものという、作者の感性に惹かれました。作文「花火とわたしの志」では、七夕祭り開催に携わる父親を通して、様々なことに想いを巡らせ、いつか町のために役立つ人になりたいとの志をもつ、その作者を頼もしく感じました。式に臨む受賞者の姿を目の前にして思わず目頭が熱くなり、対面開催の良さを改めて感じました。

和木こども園の実践発表では、町ぐるみ「和木学園」構想の礎となる円滑な園小接続の研究と、その成果と課題について発表が行われました。周東中学校、及び玖珂中学校の実践発表では、両校生徒会役員がふるさとへの誇りと愛を堂々と自信をもって語りました。これら子どもたちの活気ある園・学校生活は、いずれも地域教育ネットの仕組みを生かした学校・園づくりの成果を基盤としており、守山敏晴教育長様の記念講演からも、そのことを想見することができました。

来年度は、日本連合教育会研究会山口大会として、全国各地からお客様をお迎えして山口市民会館を主会場に、8月17日～18日に開催します。大変暑い時期になりますが、笑顔が咲き誇る実り多き大会となりますよう、多くの皆様方のご参加とご協力をお願いいたします。

第34回「金子みすゞ賞」童謡詩入賞作品

最優秀 山口県教育委員会教育長賞

あくび

山口市立大殿中学校
3年　堀　涼羽

夜ふかしをした小さな君に
授業を受ける窓際の君に
あの子のあくびにつられそうな君に
ポン・ポン・ポンと
神様があくびのたねをまきます

ムスッと無口なお父さんにもポン
怒りっぽいお母さんにもポン
近寄りがたいあの優等生にもポン
学校一怖いとウワサの先生にまで
神様は種をまき続けます

誰もが持っている小さな愛らしさを
ちょこっと咲かせるために

最優秀　山口県教育委員会教育長賞

「あくび」　堀　涼羽　山口市立大殿中学校　3年

優秀　山口県教育会長賞

小学生の部
「四季」　花田柑菜　岩国市立由宇小学校　6年

中学生の部
「八月二十日」　上原碧　下関市立山の田中学校　2年

高校生・一般の部
「遊びの時間だ」　佐久間信　東京都世田谷区

学校賞　岩国市立灘中学校（校長　青木　典生）

佳作

「わたしのピアノ」　江川あさひ　岩国市立由宇小学校　1年
「おなか博物館」　松本鼓動　下松市立下松小学校　3年
「心に住む」　兼澤幸奈　下関市立吉見小学校　5年
「背くらべ」　上薗光　下松市立公集小学校　6年
「ひっこし」　沖中祐太　岩国市立灘中学校　1年
「届くといいな」　末成ゆき子　萩市立むつみ中学校　2年
「温かい背中」　肥本珠乃　岩国市立灘中学校　2年
「もくじ」　岡詩　山口県立萩高等学校　1年
「フッとうれしくなって」　下花みどり　広島県安芸郡
「おふろ大好き」　中村悦子　宇部市

最優秀及び優秀作品は、(一財) 山口県教育会のホームページに掲載しています。小学生365編、中学生293編、高校・一般26編、合計684編の応募がありました。

第34回「金子みすゞ賞」童謡詩　審査講評

周南市立須々万中学校
校長　河辺哲也

未だ、新型コロナウィルスの感染状況は収まらず、日々自粛的な暮らしを余儀なくされています。しかし、このような生活の中にも、私たちは、「詩情」を感じています。

例えば、季節の移り変わりを、風のそよぎの中に見つけたり、夕焼けを見て、雄大さや寂しさを感じたりします。そして、その詩情は、一人一人違うのです。そこに、大きな価値があると思います。

本年度の最優秀作品「あくび」は、神様が「あくび」の種をまくという内容です。まず、「あくび」と「神様」をつなげる発想が素敵です。また、「ポン」という擬態語は、詩全体にやわらかい雰囲気を醸し出しています。特に、「神様があくびの種をまきます」「神様は種をまき続けます」という二行の「が」「は」の使い分けは、詩の世界に広がりを生み出しています。自身の詩情を、工夫して表現しようとする作者の姿勢に感心します。

小学校の部優秀賞「四季」は、「春夏秋冬」の代表するものを、「これなぁに？」と読み手に問いかけています。読み手を惹きつけようとする作者の意図が、この問いかけの形式に表れているところがおもしろいですね。また、「ゲェーコゲコ」「よっこいしょ」「ほっくほく」という言葉が、詩全体に、やわらかい雰囲気を作っています。

中学生の部優秀賞「八月二十日」は、病気になった自分自身を題材にしています。「五日前」と「あと五日」を対比的に並べながら、病気になった自分を俯瞰的に見て、ユーモラスに描くところにセンスを感じます。作者の上原君は、昨年も優秀賞を受賞しています。

高校・一般の部優秀賞「遊びの時間だ」は、連の冒頭「遊びの時間だ」のあと、大人が言いそうなセリフが第三連まで続きます。しかし、第四連では、詩の中の「子どもの私」のセリフに変わるのです。この詩を読むと、懐かしい少年時代に戻ってしまいます。

今回、応募された六百八十四編は、その人なりの詩情を、その人なりの言葉で表現しています。その行為が、とても値打ちあることであり、すばらしいと思いました。

第13回「わたしの志」作文入賞作品

最優秀 山口県教育委員会教育長賞

花火とわたしの志

山陽小野田市立高千帆中学校
2年 畑 佳奈美

コロナで中止されていた町の七夕祭りが、今年三年ぶりに開かれた。私も、祖父と祖母とでかけた。会場にはたくさんの人が来ていて、浴衣を着た人もいた。私も着てくればよかったと思った。向こうから、汗びっしょりで真っ赤な顔をした父が手を振りながらやってきた。父は朝早くから、祭りの準備のために会場にきていたのだ。今の時間は会場の警備をしている。腕も日焼けしてちょっと痛そうだなと思った。

父は祭りの準備を何か月も前からしていた。会議のために出かけていく夜もあったし、七夕祭りが近づくと、花火の協賛のお金を集めに出かけていた。前日は仕事の前にテントを立てに行き、また汗だくで帰ってきて、お風呂に入ってからスーツに着替えて父は仕事に出かけた。

去年は花火だけでも町の人に楽しんでもらいたいと、ユーチューブで花火をライブ配信することを、祭りの実行委員会の人たちは企画した。私は家のパソコンでその花火を見た。ドローンで高い場所から花火を映した映像に、私はとてもおどろいて感動した。でも、映像だけの花火は少しさみしい気持ちもした。そのことは父には言えなかった。すごかったね、と言ったら父は安心した顔をした。そして、今年やっと直接花火をみんなで楽しめるのだ。私はそのことがとてもうれしかった。

祭りではダンスや太鼓の演奏のステージを見た。空も暗くなって、いよいよ花火が上がりだした。小さな花火から、夜空に打ちあがって、みんなが空を見上げた。父が花火大会の意味について、話してくれたことを私は思い出していた。花火大会には亡くなった人を祈る意味もあるけど、平和を願う気持ちや、花火で町に元気を届けたい、盛り上げたいという思いもあるんだよ。父は花火の協賛金のお願いに色んな会社に行った時、みんな町を笑顔にしたいと快く協賛してくださったと話してくれた。

次々と花火が打ちあがって、歓声が上がると、私は誇らしい気持ちになった。警察の人や看護師さん、ステージを盛り上げる人、出店の人、そして私の父もこの空間を協力して作り上げているのだな、と思った。最後に今まで一番大きな花火が打ちあがって、滝のように花火の束が降ってきた。コロナに負けずにがんばろう、町が元気になりますようにという気持ちも一緒に降ってくるようだと私は思った。花火は簡単には打ちあがらない。父も含めたたくさんの人が協力して、やっと打ちあがるのだ。

私は今、中学二年生だ。来年には三年生になり、あっという間に受験生だ。夏休み前の三者面談で、進路は何か考えていますか、と先生に聞かれたとき、私はドキッとした。具体的にこの職業につきたい、と決まっていなかったからだ。どんな会社でどんな仕事をするかは決まっていないけど、私には一つの志はある。それは、父のように誰かのために、町のためにみんなを笑顔にするような活動をすることだ。私ができることは、小さなことかもしれないけれど、そんな大人になりたいと思っている。

花火が終わると、みんな会場を出ていく。キレイだったね、と聞こえてうれしかった。私が家に帰ってからも、父はなかなか帰ってこなかった。会場の片付けをしているのだな、と思った。祭りはたくさんの人の協力で開催される。そして、参加する人もマスクや消毒をするなどのルールを守ることで協力をする。七夕祭りがちゃんと終わって私はほっとした気持ちになった。そして、お祭りはいいな、また来年もこの会場で花火が見たいな、と思った。

私の町の花火は、テレビでニュースになるような、大きな花火大会ではない。花火の数も少ないかもしれないけれど、みんなを笑顔にしてくれた。同じ花火をみんなで見て、町が一つになるような感じがした。町が元気になると、祖父も祖母も元気になるし、いいことばかりだな、と思った。

七夕祭りが終わって、夏休みも残り半分になった。父は忙しく仕事をしている。私も部活と宿題をがんばろう。将来、町の人のためになるには、まず自分が勉強をしっかりして、目の前のことに全力で取り組まないといけない。周りの人に感謝して、残りの中学校生活を送っていきたい。私の志はまだ小さいけれど、いつか町のために役立つような人になりたい。今年の花火は私をそんな気持ちにさせてくれた。

「わたしの志」作文入賞者表彰

第13回「わたしの志」作文入賞作品

最優秀　山口県教育委員会教育長賞

「花火とわたしの志」　畑　佳奈実　山陽小野田市立高千帆中学校　2年

優　秀　山口県教育会長賞

小学生の部

「『吉田松陰』と『夢』」　村下　湊心　岩国市立由西小学校　5年

中学生の部

「十四歳の私から」　西尾　唯花　下関市立山の田中学校　2年

高校生の部

「絶対に変わらない」　西村　優茉莉　柳井学園高等学校　1年

優　秀　松風会理事長賞

「ぼくの志を支える『一二の才能』」　森田　凌生　萩市立明倫小学校　6年

佳　作

「志への小さな一歩」　森田　悠斗　萩市立明倫小学校　4年

「私の夢」　林　菜々穂　萩市立椿東小学校　5年

「ぼくの志」　山縣　天優　萩市立明倫小学校　6年

「努力する」　岩本　優和　山陽小野田市立高千帆中学校　2年

「私の夢」　川中　桃香　岩国市立周東中学校　3年

「ゆるぎない努力。そして志。」　杉本　陽和詩　宇部市立川上中学校　3年

「最高の舞台へ」　中村　友紀　山口県立萩高等学校　1年

「未来の自分のために」　岩本　リカ　山口県立下松工業高等学校　1年

「(シン・シンライ)」　中田　雄大　山口県立下松工業高等学校　1年

「人生山あり谷あり」　藏中　亜友　柳井学園高等学校　2年

最優秀及び優秀作品は、(一財)山口県教育会のホームページに掲載しています。小学生71編、中学生104編、高校生37編、合計212編の応募がありました。

第13回「わたしの志」作文　審査講評

公益財団法人松風会
事務局長　川上修一

第13回「わたしの志」作文は、コロナ禍の影響からか例年に比べ、やや少なめの応募でしたが、読み応えのある作品が多くありました。

最優秀賞の「花火とわたしの志」は、コロナ禍、町の七夕祭りのスタッフとして懸命に取り組む父親の姿から、誰かのため、町のためにみんなを笑顔にする大人になりたいという思いが、生き生きと表現されていました。

小学生の部優秀賞の「『吉田松陰』と『夢』」は、スポ少の野球チームでの体験と学校で学んだ吉田松陰先生の言葉から、自分自身のこれまでの取組を振り返り、夢ができたときにはその実現に向けて計画を立て、実行し続けて行こうとする決意が伝わって来ました。

中学生の部優秀賞の「十四歳の私から」は、自分の二つの大きな夢について、その理由が分かりやすく丁寧に書かれていました。また、無限の可能性がある未来の自分に向けたメッセージとして、とても力強い言葉で書かれていて、大いに感銘を受けました。

高校生の部優秀賞の「絶対に変わらない」は、小学生の時に自分の妹たちの出産に立ち会った体験やテレビドラマの場面などから、助産師になることを夢に描き続け、やがてその夢が、実際の進路の選択につながっていく過程が丁寧に表現されていました。また、今後乗り越えていかなければならない課題に対して立ち向かって行こうとする決意も力強い言葉で書かれていました。

松風会理事長賞の「ぼくの志を支える『一二の才能』」は、毎朝学校で行っている松陰先生の言葉の朗唱の中で一番印象深かった言葉と日ごろの学級担任とのかかわりを通して、自分の「一二の才能」を生かし、「志」を達成しようとする強い思いが感じられました。

「志」は夢や憧れ、体験や進路と結びついたものなど捉え方も様々です。「志」をどう捉えるかによっていろいろな表現ができますので、多くの皆さんの応募を期待しています。なお、今回の応募作文の中には、誤字や脱字、表記の誤りがあるものもありました。提出に際しては、再度の確認をお願いします。

審査の様子

地域活性化活動助成事業

学校や地域の幸せな生活と未来のために

岩国市立柱野小学校
校長　藤村　純子

本校は、岩国市の西部に位置し、周囲を山に囲まれ、中央には川が流れ、豊かな自然に恵まれています。この地方の歴史は古く、江戸時代には旧山陽道の往還道として栄えていました。学校は、140余年の歴史があり、古くから地域に愛され、地域の伝統文化の継承や行事等の実施も、学校と地域が連携しながら取り組んできました。

このような環境の中、４月に『しあわせ総会（熟議）』を実施し、学校や地域の幸せな生活と未来のためにできることを、子どもたちと保護者・地域の方で話し合いました。そして、地域の方等のご協力のもと、ホタルが住める川づくりへの呼びかけやゴミ拾い運動、自然の中で学ぶ体験、地域の歴史を知る旧山陽道・文化財巡り等の活動を進めています。

さらに、11月には、子どもたちと保護者・地域・スポーツ団体の方が学校に集い、『柱野ふれあいスポーツフェスタ』を開催しました。オープニングは、伝統として受け継いできた「柱野太鼓」を、日々見守ってくださる方への感謝の気持ちを込めて披露しました。太鼓の音は力強く響き、「元気をもらいました！」という声に、子どもたちはとても喜んでいました。その後、グラウンドゴルフやペタンク、子どもたちが企画したゲーム等をたくさんの方に楽しんでいただきました。スポーツを通したふれあい活動からは、一体感が生まれ、みんなの笑顔があふれました。これから実施するしめ飾り作りやとんど祭り集会等でも、地域とのつながりを大切にしていきたいと考えています。

１年間を通して、様々な活動を実施するにあたり、山口県教育会の地域活性化活動助成事業よりご支援をいただき、活動の幅が広がったことを大変ありがたく思っています。

地域とともにある活動の中で、学校と地域が双方向で活性化し、子どもたちはふるさとへの愛情を深め、未来のふるさとを創造しようとする心が育っていくのではないかと期待しています。

伝統を受け継いできた「柱野太鼓」～力いっぱい太鼓を演奏する子どもたち～

学校と地域を繋ぐ「出前あいさつ運動」
～地域をあげて「レベル５のあいさつ」をめざす～

下関市立東部中学校
校長　小戸　　毅

文字通り下関市の東部海岸にある本校は、御殿山と呼ばれている小高い丘の上にあった旧毛利清末藩の陣屋跡に建つ、森に囲まれた静かな教育環境が自慢の学校である。校区内には、商業地として発展した小月、海沿いの広大な干拓地を含め農業を主に発展してきた清末と王司の３地区があり、近年は宅地化が進み、生徒数が増加傾向にある。

本校では、校区内の２幼稚園と３小学校とともに共通取組事項を定め、地域の子どもたちの育ちを支援してきたが、昨年度からは「あいさつ」の向上に取り組むこととし、連携・協働して育成に努めてきた。その取組の一環として、学期に１回、ボランティアの生徒が登校時に小学校へ出向く「出前あいさつ運動」を実施している。さらに今年度は「レベル５のあいさつに挑戦する」ことを目標に取組を進めてきたが、学校運営協議会のある委員から「中学生はよくあいさつをするようになったが、大人の方があいさつしない」という意見が出された。ならば、小学校だけでなく地域の方々にもあいさつの輪を広げようということになり、活動場所に小月駅前を加えることとした。

地域に出ていくからには、中学生の活動をアピールするために幟旗を用意してはどうか、と話が盛り上がり、製作費を工面する中で、教育会の「地域活性化活動助成事業」に申請してみよう、ということで申請をしたところ、見事助成の対象となり、幟旗を製作することができた。

当日は、地域団体の東部５地区まちづくり協議会や、校区を管轄する長府警察署、さらにＰＴＡも巻き込んで、本校生徒の１/３にあたる約180名のボランティア生徒が参加する、まさに地域をあげての「出前あいさつ運動」となった。

駅前で幟旗を掲げ、通勤・通学中の方々へあいさつをした生徒は、「あいさつをしたら通勤途中の方からあいさつを返されたので、うれしかった」と素直に喜んでいた。校区内にあいさつの輪を広げられたことに、満足そうな顔をしていた。

出前あいさつ運動

学校教育におけるSDGsの取組の推進～防府市～

防府市教育委員会教育部学校教育課
指導主事　吉村友恵

２０５０年カーボンニュートラルの実現に向けて、それぞれの学校で温室効果ガスの排出を減らすための取組が進められています。

今年度から防府市では、学校給食で提供される牛乳が、瓶からすべて紙パックに変わりました。これを機に、ＳＤＧｓ（持続可能な17の開発目標）の視点から子どもたちの環境問題や資源の有効活用に対する意識向上を目的として「ほうふっ子エコスクール事業」を開始しました。具体的には、原則水曜日を「エコの日」と定め、全小・中学校で一斉に牛乳パックのリサイクルを行っています。年度末には、リサイクルされ生まれ変わったトイレットペーパーが子どもたちの手に届く予定です。２００㎖牛乳パックが18パックでトイレットペーパー１ロールを作ることができると言われています。このリサイクル体験をとおして、環境教育を推進しています。

ほうふっ子エコスクール事業イメージ

この牛乳パックのリサイクルの取組は、防府市の小学生に配られる環境副読本「知ろう！防府市の環境～私たちにできること～」にも掲載されています。この副読本には、社会科や理科、家庭科などの教科書の関連ページが掲載されており、教科で学習したことと自分の住んでいる防府市の環境とを関連させて学習することができます。子どもたちが自分のこととしてＳＤＧｓの理解を深め、環境について学べるものとなっています。中学校で行われた授業では、身近な食品ロス問題をとおしてＳＤＧｓを学びました。養護教諭も授業に参加し、身体の成長や健康のために食べることが大切であると伝えました。このように、これまでの学習と関連させてＳＤＧｓや環境問題について知り、自分のこととして考えられるような取組が行われています。

環境副読本

図書館司書と連携した取組も行われています。全国学力・学習状況調査において、山口県の子どもたちは全国平均よりも多く「読書が好き」と答えています。防府市の小・中学校の図書館では、10月からの1カ月間、ＳＤＧｓに関する本などを集めたコーナーが設置されました。読書活動からもＳＤＧｓの理解を深めています。

このように、各学校では、学校の実態に合わせた取組が行われています。各学校へ行ったアンケートでは「社会の学習から『学校のリサイクル』について関心をもつようになった」「お昼の放送で、子どもが委員会活動として自発的に『エコの日』を紹介するようになった」「家庭でもリサイクルに対する意識が高まり、ペットボトルキャップの回収を始めた」という声が聞かれました。

これからの未来に向けて、世界をあげて地球を守るための活動が始まっており、私たち一人ひとりの行動が求められています。防府市の小・中学校では「ふるさとを愛し、未来につなぐ人」をめざし、これからも環境教育を推進していきます。

図書館「ＳＤＧｓコーナー」